

# 何が外国語学習者のやる気を失わせるか？

—— 動機減退の原因とそれに対する学習者の反応に関する質的調査 ——

荒井 貴和

## 要 旨

外国語学習の動機づけについて多角的な研究が行われているが、動機づけの低下や喪失に注目した研究はほとんど行われていない。本稿では動機づけの減退 (demotivation) に注目し、外国語学習でどのような体験が動機を失わせるかを日本人大学生を対象に調べた。同時にそのような体験に対して学習者がどのように反応したかも調査した。調査は自由記述式で得られた内容を分類した。結果として動機減退に教師の与える影響は非常に大きく、全体の原因の半分近くが教師によると考えられる。また動機減退を体験した学習者の反応の約6割が学習に対して否定的であったり最低限の学習に留まったりしていた。外国語学習の成功のためには教師側の最大限の配慮が必要であり、学習者との協力関係をいかに築くかが鍵となる。

## I. はじめに

外国語 (L2) 学習の成功には学習者の動機づけ (motivation) が非常に重要な要因のひとつであり、これに関連した研究が今日までに様々な形で行われてきている。さらに教室での外国語教育においても学習者の動機づけをいかに高めるかが重要な課題となっている (Oxford 1996, Brown 2001)。しかし、たとえ学習者が高い動機づけを持っていても、あるいは苦労して動機づけを高めたとしても、動機づけを維持しつづけるのは大変なことである。それにもかかわらず、私たちは授業においてせっかくの動機づけをわざわざ弱めたり、反対に失わせたりするようなことをしていないだろうか。このような学習者の動機づけを減少させ、失わせる動機減退 (demotivation)<sup>(1)</sup>については研究がほとんど進んでいないのが現状である。本稿では日本人学習者を対象にして、動機減退の原因にはどのようなものがあるのかを調査し、具体的内容をデータに基づき分析する。それとともに動機づけを失わせるような体験をしたとき、学習者はどのように対応したかについて調べていく。

## II. 動機減退に関連した研究

1970年代以降外国語教育の分野では、教授法そのものというよりむしろ学習者に焦点をあてた研究が主流となっている。そのひとつが学習者の動機づけに関する研究である。これは Gardner たちの研究 (Gardner and Lambert 1972, Gardner 1985) を先駆とし、以降様々な研究者らによって調査研究が手がけられ、近年 Dornyei らによってさらに大きく発展している (Dornyei 2001, Dornyei and Schmidt 2001)。しかし、動機づけの低下や喪失についての研究はほとんど行われておらず、特に外国語学習に関したものは非常に少ない。以下では動機減退に関連があると思われる研究をとりあげて

いく。なお、動機減退 (demotivation) とは、特定の外的要因の働きかけによって動機づけが減少させられる、または失わさせられることである (Dornyei, 2001: 143)<sup>(2)</sup>。

### 1. 第一言語 (L1) のコミュニケーション研究における動機減退に関する研究

動機減退の研究としては、第一言語 (L1)、つまり母語による授業中のコミュニケーションの研究の中で扱われたものがある。Christophel and Gorham (1995) によると動機減退の原因の2/3は教師によるもので、教師が行ったことや教師に責任があることが原因になっているという。また様々な動機減退の要因のうち出現頻度が高かった上位5つのカテゴリーは以下のものであった (Gorham and Christophel 1992)。

1. 成績や課題に対する不満
2. 教師が退屈、きちんとしていない、準備不足
3. 教科が嫌い
4. 教材の組み立てが悪い
5. 教師が近づきにくい、自己中心的、偏見を持っている、侮辱する

このカテゴリーのうち、2と5は直接教師にかかわることだが、1と4も間接的に教師が影響していると考えられる。

### 2. 外国語 (L2) 学習における動機減退の研究

外国語学習の分野での動機減退の研究で体系だったものはまだないようで、ここでは次の2つの報告を取りあげる。

Oxford (1998) は外国語学習者に学習体験を記述させ、内容を分析している。そのうち学習者が授業中不快に感じたり教師と衝突したりしたことについて書いた文章を分析した結果、以下の4つのテーマが現れたと報告している。

- ・教師の学習者との個人的関係 (親密さの欠如、敵対心、あらさがし、ひいきなど)
- ・教師のコースや教材に対する態度 (熱意の欠如、ずさんな管理、了見の狭さなど)
- ・教師と生徒のやり方の衝突 (方法の違い、授業の真剣さに対する衝突など)
- ・授業活動の性質 (無関係、過重負担、くり返しの多さなど)

また、Dornyei (1998) は学習者のやる気にマイナスの影響を与えるものとして以下の9種類の要因をあげている。

#### 1 教師

- 2 自信のなさ
- 3 学校の設備の不備
- 4 外国語 (L2) に対する否定的な態度
- 5 外国語 (L2) 学習が強制的であること
- 6 別の外国語 (L3) の干渉
- 7 外国語 (L2) を母語とする集団に対する否定的態度
- 8 授業におけるグループの態度
- 9 教材・教科書

このうち最も多かったのが「1 教師」に関係したもので、全体の40%に達した。具体的には、教師の性格、教育へのかかわり方、生徒への注意力、能力、教授法、人間関係などが挙げられている (Dornyei 1998, 2001)。

これら2つの報告からはっきりすることは、第一言語 (L1) のコミュニケーション研究の結果と同じく外国語学習においても教師の影響が非常に大きいということである。

### 3. 日本における「英語嫌い」の調査

日本では動機減退そのものの研究はほとんど見られないが、これまでに「英語嫌いの原因」という視点から調査が行われている。特に中高生の英語嫌いについての調査は数多い。斎藤 (1984) によると、高校生対象の調査では「英語が嫌い」なのは68.5%にのぼる。その原因としては「文法構文・発音が難しい」、「単語がわからない」、「授業がわからない・楽しくない」、「先生がきらい」といった項目があげられていた。また、中学生を対象にした調査では「英語がおもしろくない」と答えたのが32.4%で、理由は「めんどうで覚えるのがいや」、「授業の雰囲気・教師のせい」、「教科書の内容がつまらない」となっていた。

さらに、松畑が行った中学生対象の調査では、英語が嫌いになった原因として多い順に「授業の内容が難しくなってわからなくなった」、「先生の教え方が悪い／先生が嫌い」、「テストの成績が悪い」、「単語の意味がわからない」、「授業がおもしろくない」といった項目があげられている (羽鳥・松畑 1980: 176)。

ここで英語が嫌いになった要因として共通しているのが「教師」と「内容 (わからない・難しい)」であろう。特に学習者の期待と実状がかけはなれていると落胆が大きく、結果として英語に対する学習意欲の低下、動機減退につながると考えられる。

以上見てきたように、外国語学習における動機減退に関しては体系だった研究はまだほとんどなく、本格的な研究の前に予備的調査研究が必要な段階といえよう。本稿では何が学習者の動機づけを失わせるのか、まず実際のデータを収集し、その内容を検討して質的に調査することを目的とした。学習者のやる気を失わせるような体験はどのようなことだったかを学習者自身に尋ね、内容に

よって分類を試みる。さらにこれまでの研究でほとんど取り上げられていなかったことであるが、その体験に対して学習者はどのように反応したかについても調べ分析していく。

### Ⅲ. 動機減退についての調査手順

#### 1. 被験者

被験者は都内私立大学の日本人大学生33人（男11名女22名）である。英語専攻の学生が中心で、比較的英語のレベルも高く、外国語学習にある程度成功した学生の集団であると考えられる。なお、海外で長期間生活したことのあるいわゆる帰国子女は学習の条件が大きく異なる可能性が高いため、今回の調査の対象から除外した。

#### 2. 調査方法

被験者にアンケート調査<sup>(3)</sup>を行い、その中で「今までうけたことのある語学（外国語）の授業で、あなたのやる気を失わさせるようなことがありましたか？ それはどんなことでしたか？ また、あなたはそれに対してどのように対処しましたか？」という質問をして、回答を自由に記述するように指示した。回答に制限時間はもうけなかったが、アンケートの他の項目も含めて全体でおよそ15～20分程度で記入は終了した。アンケート調査は2002年6月に実施した。

#### 3. データの分析方法

動機減退についての被験者の記述を細分化し、出てきた内容によって項目を設定して分類し、出現回数を調べた。自由記述式で被験者によって記述の仕方が異なるため、動機減退に直接つながる体験のみに焦点をあてた。

また、どのように対処したかについては、記述内容に基づき、学習に対してプラスになる反応か、マイナスになる反応か、あるいはそのどちらでもない反応か、という視点から分類を試みた。

### Ⅳ. 結果と考察

今回の調査では動機減退させるような体験が特にないと答えた被験者が2名いたので、以下の分析はこの2名を除いた31名のデータに基づいて行ったものである。動機減退の体験時期については小学校1、中学校5、高校8、大学2、その他（塾など）2であった（複数回答）が、時期を特定しなかった被験者が18名いた。学習言語の多くは英語と思われるが、言語を特定しなかった被験者もいたため断定はできない<sup>(4)</sup>。

回答の記述の仕方は一様ではなかったため、被験者の記述を細分化した結果全体として105件にわけることができた。内容を検討した結果、やる気を失わせた要因として「A. 教師」、「B. 授業」、「C. クラスの雰囲気」、そしてどれにも当てはまらない「D. その他」の4つの要因別に分類した。それぞれの要因にあてはまる記述の出現回数をグラフに表したのが図1である。

図1で明らかのように「A. 教師」による要因が最も多かったことがわかる。それぞれの要因をさ

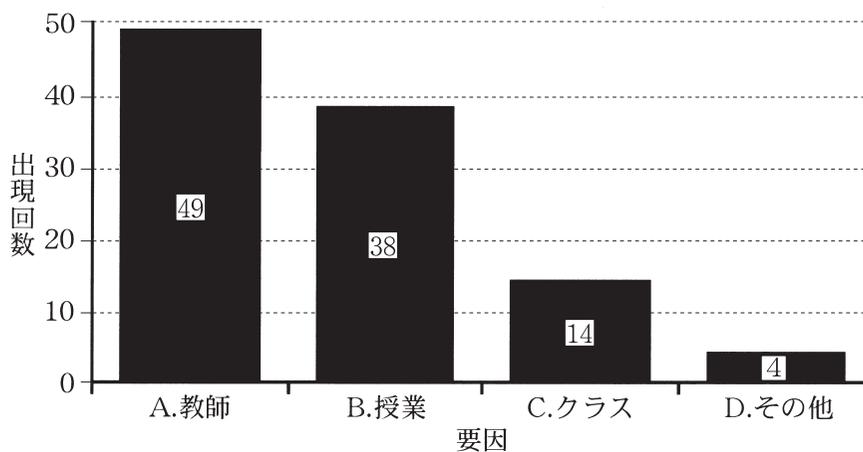


図1 動機減退の要因と出現回数による分布

表1 動機減退の要因の出現回数とパーセンテージ

動機減退の要因	出現回数	(%)
A. 教師		
A-1 生徒に対する接し方	16	15.2%
A-2 人柄	13	12.4%
A-3 教え方	12	11.4%
A-4 語学レベル	8	7.6%
小 計	49	46.7%
B. 授業		
B-1 ~するだけ/フィードバックなし	11	10.5%
B-2 単調/退屈	10	9.5%
B-3 レベルが合わない	8	7.6%
B-4 教材がおもしろくない	2	1.9%
B-5 その他	7	6.7%
小 計	38	36.2%
C. クラスの雰囲気/クラスメートとの関係		
C-1 活気がない	4	3.8%
C-2 積極的に話そうとしない	3	2.9%
C-3 まわりとレベルが違う	3	2.9%
C-4 その他	4	3.8%
小 計	14	13.3%
D. その他	4	3.8%
全体の合計	105	100.0%

(注) A～Cについては多く出現した項目を下位項目として記載し、いずれにもあてはまらないものはその他として扱っている

らに下位区分し、複数回出現した項目をまとめた結果が表1である。

「A. 教師」による要因が46.7%と全体の要因の半分近くを占めているが、その中でさらにくわしく分類したところ、最も多かったのは「A-1 生徒に対する接し方」に関することであった。具体的には「生徒とコミュニケーションをとろうとしない(6)」、「生徒の間違いや質問に対して不機嫌になる(3)／笑う(2)／殴る(1)」という記述が見られた(括弧内は出現回数。以下同様)。不機嫌になったり笑ったりというネガティブな反応と同じく、コミュニケーションをとらないという無反応も動機減退の要因になっている。ここから、学習者は教師がどのような反応をするかに大きく左右されることが見てとれる。次に多かったのが教師の「A-2 人柄」で、これには「一方的(2)」、「意地悪／怒る(2)」という答えがあった。これらは「A-1 生徒に対する接し方」と重なる部分であり、教師と生徒の十分な意思疎通や信頼関係の重要性を示している。教師の「A-3 教え方」では、「声が小さい(3)」、「手抜き／計画性がない(2)」、「特定の表現しか評価しない(2)」といった答えがみられた。教師の手抜きや計画性のなさはむろん許されることではないが、「声が小さい」というごく基本的なことができていないだけで生徒がやる気を失うことがあるのに注意したい。教師の「A-4 語学レベル」について最も多く見られたのが「発音の悪さ(4)」である。学習者は教師の文法やスペルミスに対しても敏感であり、教師自身のレベルや力量の低さが学習意欲の低下につながる可能性が高い。

「B. 授業」に関する要因は全体の3割以上で、多様な回答が見られた。なかでも多かったのが「B-1 ～するだけ／フィードバックなし(11)」と「B-2 単調／退屈(10)」であった。「B-1 ～するだけ」とは特定の活動のみに終始し、しかも教師からの説明や解説などのフィードバックがない場合のことである。授業の活動としては「訳す・読む」だけという以外に「リスニング」だけという回答も見られたので、必ずしもいわゆる訳読式だから悪い、音声を扱っているから無条件によいというわけではないようである。活動が同じものばかりということは「B-2 単調／退屈」にも関連していると考えられる。活動に変化を持たせたり、応用を工夫したり、教師から十分なフィードバックを与えることが授業においてさらに求められる。授業の「B-3 レベルが合わない」という回答も比較的多かったが、「易しすぎ(5)」でも「難しすぎ(3)」でも動機減退につながるようで、個々の学習者のレベルにあわせることが大きな課題となる。

3番目に分類したのが「C. クラスの雰囲気／クラスメートとの関係」による要因である。「C-1 クラスに活気がない(4)」、「C-2 まわりが積極的に話そうとしない(3)」という雰囲気だとしても授業活動も活発でなくなり、やる気のある生徒まで動機減退する可能性がある。また「C-3 まわりとレベルが違う(3)」では、クラスメートのレベルと合わないことが動機減退になっている。特に自分よりできる生徒に囲まれると気後れして学習に参加しづらくなるようである。このようにクラスやグループのメンバーによる影響は無視できない。近年グループワークを授業で用いることが増えているが、この点に十分な配慮が必要であろう。

上の3つの分類のいずれにもあてはまらなかったものを「D. その他」としたが、記述は少なく、個別の内容は「黒板が見えにくい」、「換気が悪い」という教室環境そのものについてや、クラス以外

の友人関係などであった。

以上の結果から、関連した研究と同じく、教師による影響の大きさが再認識された。学習者はそれぞれ考え方や個性が違うので全ての学生にあわせられるわけではないし、人間同士の相性もある。しかし学習がうまくいくためにはやはり教師と生徒との関係が極めて重要である。特に教え方や態度については教師側の配慮が必要だといえよう。また、授業の内容や進め方、活動の選択などは教師の責任に負うところが大きく、教師側の授業に対するさらなる工夫や考察が求められよう。

次に、学習者が動機減退の体験に対してどのように反応したかを、記述に基づいて分類していく。なお、「何も対処しなかった」と書いたり、反応を全く記述していない被験者が5名いた。それ以外の回答を細分化すると合計44件になり、これらを学習に与える効果によって「プラスの反応」、「マイナスの反応」、「中立的反応」の3つに分類した。「プラスの反応」とは学習により効果を与えると考えられる対応、「マイナスの反応」とは学習に否定的に働く対応で、そのどちらとも決められないものは「中立的反応」とした。それぞれの出現回数の分布が図2である。

今回の被験者は「プラスの反応」と「マイナスの反応」が同数で、「中立的反応」もやや少ないものの、およそ3等分される結果となった。

それぞれの回答の内容をくわしく見ていくと「プラスの反応」では、自分で勉強するという「自己学習（8）」が最も多くみられ、「プラスの反応」の半分の回答がこれにあたる。具体的には「テープを聞いて発音／練習する（2）」、「自分のやり方で勉強する（3）」といった内容であった。また「外国へ行く（2）」、「会話学校へ通う／違うクラスに変える（2）」という答えも見られた。これらは様々な要因から動機が弱められても自分で何とかして学習を続けようとする姿勢の表れと考えられる。なお、授業を改善してほしいという要望を「手紙に書いて教師に渡した」という被験者も1名いたが、特に改善されなかったとのことであった。積極的に教師に働きかけたにもかかわらず残念な結果である。

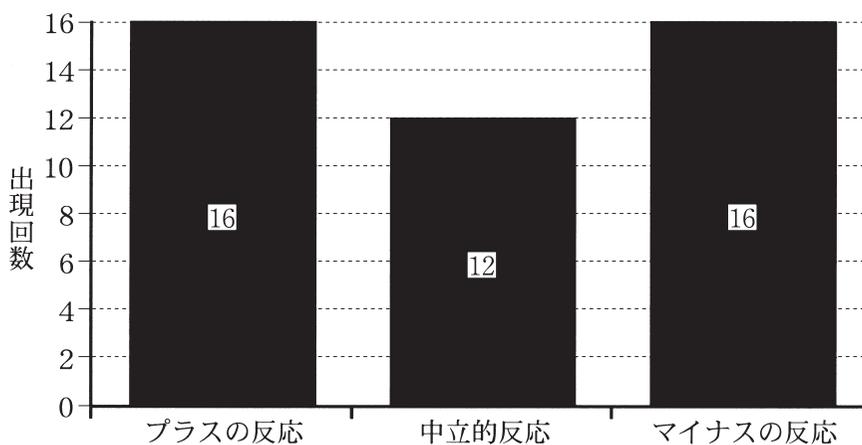


図2 動機減退に対する反応

「中立的反応」としては「我慢する（6）」が最も多い回答で半数を占めている。それ以外でもとりあえず最低限だけやって授業をやり過ごすといった内容が多かった。このような回答からだけでは学習に効果があったかどうか一概にはいえないので中立的として扱った。

「マイナスの反応」としては、「寝る（4）」と「他のことを勉強した（4）」が同数であった。それ以外にも「ぼーっとする（1）」「教師の話を聞かない（1）」「読書（1）」など授業からの逃避行動がみられた。なお今回の被験者には教師に反抗するといった攻撃的な反応を記述した被験者はいなかったが、実際の中・高校生の反応としてはでてくる可能性があるだろうと思われる。

このたびの被験者は英語学習が比較的うまくいった大学生で、動機づけを減退させられるような体験をしても、それを乗り越えて「自分で勉強する」といったプラスの反応がある程度みられたと考えられる。しかし、それでもなお6割以上が学習を最低限に留めたり、全く学習とは無関係のことをしたりという反応をした。ましてや学習がうまくいかなかった学習者が対象であったとしたならば、おそらくもっとこのようなマイナスの反応がでてくるのではないかと予想される。動機減退は学習の妨げとなると結論づけられ、動機減退につながるような要因は極力減らしていく必要がある。

## V. おわりに

動機づけの研究にくらべると動機減退の研究はごくわずかで、その影響の大きさや、影響の及ぶ範囲、その永続性（一時的なのか、長期にわたるのか）などについてあきらかではないことが多々ある。本稿では動機減退の質的研究を試みたが、まだ予備調査の段階である。このたび得られた結果に基づいて、今後は量的研究を行い、結果のさらなる一般化を図りたい。質的・量的研究を継続的に行い、結果を融合させていくことが研究の発展に非常に大切であるからである（山西・田中：2003）。

今回の調査はデータ収集方法が被験者の自由記述であったため、多様な回答が得られた反面、被験者によって回答の仕方が異なり、はっきりしない部分もみられた。項目を精選したアンケートや、個別のインタビューなどを実施して傾向を明らかにしていくことが今後の課題となる。分類についてもさらにデータを収集して、分類方法や分類項目などを再検討する必要がある。また、英語学習がうまくいかなかった学習者に対しても同様の調査研究も行わなくてはならないだろう。今回の被験者と比較することによって、なにが学習の成功につながるのかが見えてくる可能性がある。

外国語学習において学習者の動機づけを高め維持させることが大切であることはいうまでもない。しかしせっかくの動機づけが無効になるようなことをしていないか、私たち教師はもう一度考え直す必要がある。このたびの調査で得られた結果からわかるとおり、教師の及ぼす影響は思っている以上に大きい。現在多くの大学で学生による授業評価が行われているが、教師が学生の意図をうまく汲み取れるかどうかには疑問が残る<sup>(5)</sup>。さらに学生から教師に積極的に働きかけることはあまりたやすいことではないようである。しかし、学生との協力と意思疎通をはかることが学習を成功させるためになによりも大切である（Chambers 1993, Oxford 1998）。教師は学習者の動機づけを高めることを手助けしていくとともに、動機づけを減退させないような心配りがいっそう求められる。

## 注

- (1) Demotivation には定まった日本語の訳語がないようで、垣田・三浦（1983）では「学習意欲低下」となっており、他にも「意気阻喪」（リーダーズ英和辞典）という訳語があったが、本稿では「動機減退」という用語で統一する。
- (2) なお、最初から全く動機がない状態は無動機（amotivation）と呼んで、動機減退とは区別する（Deci and Ryan 1985）。
- (3) アンケートにはこの他に学生に対するフェイスシートと動機づけの選択式アンケートが含まれていた。
- (4) 内訳は英語と言語を特定した被験者13名、それ以外の言語（中国語）1名（複数回答）で、学習言語を特定しなかったものが18名であった。
- (5) 学生による授業評価で問題になるのは、内容もさることながらその実施時期である。通常授業期間の最後に行われることが多いので、翌年度の授業に反映することはできても、そのときに担当している学生に対するフィードバックは困難なことが多いと思われる。

## 参考文献

- 垣田直巳監修・三浦省吾編（1983）.『英語の学習意欲』大修館.
- 斎藤栄二（1984）.『英語を好きにさせる授業』大修館.
- 羽鳥博愛・松畑熙一（1980）.『学習者中心の英語教育』大修館.
- 松田徳一郎監修（1984）.『リーダーズ英和辞典』研究社.
- 山西博之・田中博晃（2003）.「英語教育学研究における質的研究と量的研究の融合」『Language Education & Technology』外国語教育メディア学会 40: 161-173.
- Brown, H. D. (2001). *Teaching by principles* (second edition). Longman.
- Chambers, G. (1993). "Talking the 'de' out of demotivation." *Language Learning Journal* 7: 13-16.
- Christophel, D. and Gorham, J. (1995). "A test-retest analysis of student motivation, teacher immediacy and perceived sources of motivation and demotivation in college classes." *Communication Education* 44: 292-306.
- Deci, E. and Ryan, R. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum.
- Dornyei, Z. (1998). "Demotivation in foreign language learning." Paper presented at the TESOL '98 Congress, Seattle, WA, March.
- Dornyei, Z. (2001). *Teaching and researching motivation*. Pearson Education.
- Dornyei, Z. and Schmidt, R. (eds) (2001). *Motivation and second language acquisition*. Second Language Teaching Curriculum Center, University of Hawai'i.
- Gardner, R. C. (1985). *Social psychology and second language learning: the role of motivation*. Edward Arnold.
- Gardner, R. C. and Lambert, W. (1972). *Attitudes and motivation in second language learning*. Newbury House.
- Gorham, J. and Christophel, D. (1992). "Students' perception of teacher behaviors as motivating and demotivating factors in college classes." *Communication Quarterly* 40: 239-52.
- Oxford, R. (1998). "The unravelling tapestry: Teacher and course characteristics associated with demotivation in the language classroom." Paper presented at the TESOL '98 Congress, Seattle, WA, March.
- Oxford, R. (ed.) (1996). *Language learning motivation: Pathways to the new century*. Second Language Teaching Curriculum Center, University of Hawai'i.